

論文審査の結果の要旨

氏名 片岡 大右

フランス・ロマン主義の先駆けであり、社会への嫌悪と不適応に悩む自我を『ルネ』を始めとする小説のうちに描き出したシャトーブリアンは、また十八世紀啓蒙思想に対抗してキリスト教の復権を主張し、その文明史的意義を強調する護教論『キリスト教精髓』を著し、近代フランスの宗教観と文明観の転換に大きな影響を及ぼした。本論文は彼の膨大な著作を広くまた緻密に読み解くことを通じて、彼が宗教と文明に対していかなる態度を取り、いかなる思索を展開したかを解明することを目指す。その際、考察の導きの糸になるのは、ヨーロッパ思想史において文明と自然の関係を考える上で鍵となる三つの形象、すなわち隠遁者、蛮人、野生人である。片岡氏はフランスのみならずスペインの文献を広く渉猟して、これらの形象がルネサンスから十八世紀に至るまでヨーロッパの思想的伝統において蒙った複雑な意味の変遷を丹念に辿り、これらの形象がシャトーブリアンにおいて、どのように機能し絡み合いながら、宗教と文明に対する彼のスタンスを表現しているかを論ずる。

論文は五部からなる。第一部では、シャトーブリアンが護教論としての『キリスト教精髓』をパスカルの『パンセ』になぞらえるにもかかわらず、じっさいには彼のパスカル理解は十八世紀のパスカル受容に規定されており、ヴォルテールによるパスカル批判の論旨をそのまま転倒するところに成立することを示す。第二部は、キリスト教が文明の維持と発展に寄与したと主張する『キリスト教精髓』第四部に焦点を当て、シャトーブリアンの護教論が十八世紀の啓蒙思想を受け継いで、文明の価値を肯定的に捉えていることを示した上で、それにもかかわらず彼が文明に対して抱いている違和感、そして野生人に対して示す共感を、伝道と修道院の役割に彼が送る賞賛の言葉を分析することによって明らかにする。第三部と第四部はシャトーブリアンを離れて、野生人(sauvage)と蛮人(barbare)というフランス語およびそれに対応する西洋近代語が、地域と時代によっていかなる変貌を示したかを、ルネサンス期スペインそしてルネサンスから啓蒙の時代に至るフランスを対象として観念史的アプローチを試みる。最後の第五部は、前二部の探求の成果を踏まえて、彼がフランス国民の祖先と見なされるフランク人とガリア人をどのように理解していたかを検討し、彼がフランク人を征服者、ガリア人を被征服者と位置づけるブランヴィリエの理論を退け、両者のうちに文明と野蛮が共存する両義的性質を認めようとしたことを示す。そして「野生人」についていえば、それを文明の歴史や人類学のなかに位置づけるのではなく、彼自身を始めとする特定の人間の心の状態のうちに見出し、それがあある意味で彼の文学創造の核にあることを、最後の著作『ランセの生涯』の読解によって示唆する。

本論文は、雄大な問題意識から出発し、フランスのみならず近代ヨーロッパの文学全般にわたる該博な知識、強靱な思考力とテキストの綿密な読解を武器として、シャトーブリアンが近代の始まりにあって抱えていた問題が何であるか、さらに作家個人を超えて、ロマン主義のヨーロッパにとって宗教と文明がいかなる意味を持っていたかを考察し、それに興味深い見通しを与えることに成功した。一方では、シャトーブリアンを対象とする文学研究、他方では、近代ヨーロッパにおける自然と文明の観念の変容とそれが文学と思想に及ぼした影響を跡づけた思想史研究という二面性を持っており、そのために論文全体の主張がどこにあるか見定めにくいところがあるが、それは同時に本論文のスケールの大きさの証しでもあり、全体として独創的で水準の高い論文に仕上がっている。以上から審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に相当するものと判断する。